【特別レポート】

立正大学の理念と経営の危機

〈A〉立正大学教授
〈B〉立正大学教授
ききて　丸山照雄

〈まえがき〉

立正大学を「宗立大学」としてではなく、一般私立大学に変質させ、経営主義的に運営しようとする指向性は、経済学部を設置した頃から学内に潜在していたものであろう。大学の経営的な危機が訪れるたびに、財政たてなおしのための拡大政策がとられ、施設と学生数が増加の一途をたどったのであるが、それと比例して、一般私立大学化という経営主義の路線は強固に執行部を掌握し実権をもっていったと考えられる。

現宗研調査部は、立正大学が宗立大学としての理念を失なっていく状況を憂い、各伝統教団における宗立大学の運営状況について調査を行い、宗立大学としての再建の方途を検討してきた。そのことは、すでに43年度「所報」2号で報告したのであるが宗門と立正大学の関係の複雑さや学内情況の諸側面を考慮したため、きわめて抽象的なレポートになっている。しかし、問題の所在を明示することによって立正大学執行部等の反省をうながすことになると考えたのである。宗立大学問題としてレポートをまとめることは避けながらも、教団と大学の基本的な関係や、大学の理念に関する本質的な立場についての検討すべき資料は、伝統教団調査レポートなどの調査報告のなかに分散せしめて記録してきたのであった。大学問題を真剣に考えていた人々はそれ

らを系統的にとらえることができたはずである。大学内情況に対するこのような配慮をしてきたにもかかわらず、大学執行部をはじめ関係者はこの警告を無視してきたということができるであろう。

しかも立正大学の危機は宗門人に知らせられないままますます深まり、きわめて憂慮すべき状況をむかえつつあるといえよう。

調査部としては諸条件を検討した結果現在の事態は、事実をより正しく認識することによってしか解決への方策がたたなくなったという状況判断に到達したのである。よって以下のような〈討論〉形式で立正大学に関するレポートを行うことになった。

以下の討論は、戦後いくたびか訪れた大学の危機を宗門出身教職者として体験してきた教授に出席していただき、なまなましい苦闘の経緯を語りあい、立正大学の苦悩をありのままに再現することを意図したものである。客観的状況報告も必要であるが、現在の立正大学はより主体的な状況把握によってしか現状打解は不可能であると考え、大学教員の研究者としての〈実存〉にまでかかわる地点を含めて問題提起していただいた。

過去に大学に関するこのようなレポートを受けとった経験のない宗門としては、激しい論議を呼ぶものと思う。この討論の及ぼす波紋はきわめて大きいと予想されるが、より広く声高な論議の渦のなかから、不死鳥の如く「宗立大学」としての「立正大学」が甦ることを祈りたい。

（調査部主任・丸山照雄）

丸山　日本の社会全体が大学改革を要求する学生の運動によって大きく揺れ動かされました。それが昨年一年の状況だったと思うのです。立正大学もその意味ではほかの大学と同じような学生の運動がありました。しかし、いま立正大学が危機に陥っているのは学生の大学改革の闘争によって生まれた情況によってではなくて、経営自体のなかの問題によって大学が自己解体してしまうのではないかという形で危機が迫っています。従って、官立大学やほかの私立大学が直面している問題と、立正大学における危機状況は同質な問題もありますけれど、全く独自な問題もある。学園闘争によって導き出された中央大学の経営上の危機という例もありますが、立正大学の場合は経営者が、「そういうところに問題があったんだ」といって逃げ口上として使われるだけであって、実質的にはそうではない。それは宗門大学としての立正大学の理念の危機であると同時に、経営上の危機でもあるという二面の問題があるのではないかと思います。

そこで、立正大学の実情については日蓮宗の人たちはほ

とんどなにも知らされていないし、知っていない。ただ、大学に関係する教団人がそれぞれに非常な危機を感じているし、この問題に取り組まなければならないところへ追い込まれてきている。戦後たびたび大学の危機は訪れてはきたんですけれども、今度の場合はややいままでの危機と違って、ほんとうに大学の存亡にかかわる大きな問題をはらんできたということが出来るんじゃないかと思います。

経営の問題と大学の理念の問題、それから宗門として今後大学をどのようにみていかなければならないか、あるいはまたこの危機を克服するためにどのような具体的対策が可能なのかという問題を含めて、立正大学の全体の問題について討論をしていただきたいと思うのです。これが立正大学に関する日蓮宗においては最初にして、最もち密なレポートになるんじゃないかと思いますし、それを期待しております。

A いま立正大学は理念の問題の危機と、経営の危機の二面性を持った危機に見舞われているということがいわれたわけです。確かに立正大学固有の危機というものがあるわけですけれども、立正大学の現状を考える場合に、やはり日本全体における大学の問題を一応念頭においておかなければならないのじゃないでしょうか。日本全体の大学の問題については、ここのところ方々の大学でいろいろな問題点の指摘がされているので、この問題についてここで深く検討する必要もないわけですが立正大学が一般私立大学と同じように官立大学の、例えば東大とかいう大学の制度に右へならえして、大学の自治イコール教授会の自治、というような形で、自治の問題が考えられてきたことは確です。現代社会において教授会の自治そのものが問われ学問の本質は何かと問われている現在、大学の自治が教授会の自治だけでありうるわけはないと思うんです。学生の自治というものが教授会の自治と同列に置かれるべきであり、また職員の自治というようなものも考えなくてはならないという問題が提起されてきた。

ところが、立正大学においては教授会の自治と学生の自治が同列に置かれるんだ、という学生の主張は、それがほかの大学のようにシリアスに出てこない。学生が、学生の自治と教授会の自治と同列であるといいながら、学生の自治そのものについて、学生のほうがまだはっきりつかめていない。いってみれば、学生のそういう問題のとらえ方が非常に低い次元にある。ここのところに立正大学の他大学と違った問題点が一つあると思う。

それからもう一つは、そのことをもう少し突き詰めてい

くと、「教授会の自治」として問題とされていることがらに対して、どの程度みんなが考えているのか、ということになると疑問が残ります。立正大学の教授会は相当な高年齢層の教授が多いし、そういう条件もあって、「教授会の自治」と「学生の自治」という新しい問題についての対応の仕方が非常に不明確である。それが立正大学における一つの問題になっているのじゃないでしょうか。

B　その前に、大ざっぱにいまの丸山君の問題提起の内容を少し敷衍しながら整理しておいたほうがいいのじゃないかと思うのです。Aさんのいまいったような内容にはいっていけばいまあげた問題点が確かにひとつあります。立正大学のように宗門大学として出発した大学は実にさまざまな問題を抱え込んでいる。その点をもう少し整理してみたい。宗門大学といわれる仏教の大学は大体みんなカレッジであったわけでしょう。単科大学でずっと戦前からきていた。それは非常に小規模な大学で、僧侶養成という点に力点を置いてきた。

それが戦後、ある時期から方向転換をして、いろいろな学部を作り始める。立正大学の場合、新制大学発足のときに経済学部が出来た。それを作った理由というのは全く経営的な要求からだったということが出来ます。立正ばかりではなくて、その後、駒沢、竜谷大学など、カレッジからユニバシティーへというような拡大化を行なった。それは立正大学の場合と同じように、みんな経営上の要求からじゃなかったかと思われる。そこに実はすでに問題があったんです。私立大学というものが一般に背負っている経営の問題がある。これはほかの大学とも共通している第一の問題点です。

それからもう一つは、大学のいわば水増し化のなかで、宗門大学というものが一体、何なのか再び問われなければならなくなった。そこには二つの問題がある。一つは、経営に対する宗門の持っている比重が薄まってきたということ、二つ目に、大学全体の構成のなかで従来の宗立大学の中心をなしていた仏教学科、あるいは仏教学部が、他学部を拡大していくなかで行方不明になる。所在が非常に薄れてくるということがあります。

第三番目の大きな問題は拡大が全く急速に行なわれる。竜谷の場合もそうだったと思うのだけれども、一つの学部を作ると、その作った新しい学部のなかからまた核分裂が起こるということです。そして、さらにまた核分裂が起こる。放っておくと無限に大きくなるわけです。その問題は学部の構成員にありますね。構成員は自分たちが自由にふ

るまえる学部を作りたいと考える。あるいは自分たちの存在をもっと有意義なものにしたいと思う。自分たちの専門家の数が一定の数に達すると新しい学科を作りたいとか、学部を作りたいという要求が出てくる。それをチェックするものはやはり経営者でありその論理以外になにもない。

要するに経営上の見地からみてあったほうが望ましいとかとても金がないから出来得ぬとか、そういうかたちでしかチェックする力がないんじゃないか。つまり、大学の存在する意味とか理念というような面から筋道を立てて、何学部を作ろうとか、作るべきでない、というような議論は比較的行なわれていないんです。

それから、拡大が急速に行なわれることによって大学全体の運営に問題が生じますね。そこにさっきいった教授会の自治との問題が出てきます。学部の自治、大学全体の運営の慣習、主として古い慣習が崩壊する。そういう問題がとにかく複雑にからみあって出てくる。古い考え方と新しい考え方が入り混じりながら混乱しはじめます。そのことはどこの大学にも実はあるのじゃないか。上から強力に押えるようなやり方もあるだろうし、学部自治、あるいは教授会の自治を振りかざして従来の古い慣行に挑戦するというようなところもあるだろうし、それはさまざまだけれども、相当混乱が起こっていることには違いがないでしょう。非常に現象的な面を取り上げると、大体そうなるのではないかと思う。

丸山　Aさんから出されましたことの一つは、大学における研究と教育の本質的な危機といいますか、転換期といいますか、そういう問題を一方に踏まえながら立正大学の特殊な事情というものを提出されたと思うのです。それからやや具体的な形で立正大学の経営の問題、あるいは宗門大学の理念の問題というふうな形で意見を出されました。そこで、立正大学の問題を考えていく場合、具体的な問題に当然触れていかなければならないんですが、やはりその背景に日本の大学、世界の大学全体が揺らいでいる問題がある。それは文化の変革というか、人類の文化全体に迫られている問題がある。その問題を一方に認識しながら、やはり宗門というものがどうあるべきかという問題のなかのひとつとして大学の問題があるというふうに、大状況で考えればそういうことになると思うんです。

ですから、問題の背景を踏まえながらしかも細かな、具体的な問題のなかにも貫徹していく追及の仕方があると思います。一応そこのところをおさえておいて、立正大学の具体的な現状、Bさんが指摘されたような問題を考えてい

ただきたいと思うのです。

例えば、小さな大学のときの機構が崩壊せざるをえない面と、機能を十分果たし得ないという面、それから、新しい機構というものが生まれてきても、そこに責任体制がない、無政府状態を一方で作り出していくという傾向もあるわけです。そういう問題が大学の本質的な転換という問題とも実はかかわっていかなければならない。かかわらしめて解決しないと、立正大学はほんとうにいい大学になっていかないと思うのです。Aさんのほうから出された現代における大学問題の本質的課題についても大学問題を考えていくうえでの普遍的な課題として考えていただきたいと思うのです。

Aさんがいままで実際の大学問題に取り組んでこられた経験上、現状にどういう問題があると考えられていますか。

大学の理念の問題と関係があるわけですが仏教学部の存在が薄れてきている。ただ学生数が相対的に減ってきて影が薄くなってきたということではなくて、大学の存在理由そのものにかかわっていく問題として考えなくてはなりません。存在意義そのものにかかわっていく問題です。それから、いまBさんのいわれた機構の問題があります。無責任な経営状況に落ち込んでいくような、指導性を失った大学幹部、あるいは宗門人として大学運営にかかわっている人々のあり方の問題もあります。そうした問題の現実的な結果として経済的な危機に落ち込んできたわけです。それらの問題がみんな鎖になって、固まりになっちゃっていますからね。

A さっきBさんのいった立正大学の特質というのは、「後発大学」ということばでいわれています。いわゆる旧制大学時代からカレッジとしての伝統を持っていて、それが戦後、総合大学化していく。これを後発大学と呼んでいます。後発大学はその発展過程の中に一つの問題をもっていることが多いのです。それは経営が苦しく、そのために学生がたくさんきそうな学部を作る。そして授業料をたくさん取ることによって大学の経営を豊かにしようとした。ところが、学生がくることによって、今度は設備が必要になる、人件費がふえるということで、また危機がふえていく。立正大学がかって「バナナ事件」と呼ばれている問題を起したことがありましたが、あのころは旧制大学から、「後発大学」になろうという過渡期において、総合大学を作ろう、発進しようというときに起こった問題です。つまり、大学の経営者が事業をしようとして、しかも、その事

業がはなはだ無責任だった。意図はわかるけれども、その運営の仕方が非常に無責任だったために、「バナナ事件」といわれるような不祥事を起こし、そこで財政的につまずいた。

あのころは給料が遅配になって、学校の先生は生活面で非常に苦労したわけです。その苦労を重ねながら後発大学として発進して経済学部を設立しました。しかしなおかつ「バナナ事件」の禍根がそのまま絶ち切れず昭和二十七年まで借財がふえつづける。そこで石橋さんがはいってきて会社更生法みたいに借金整理をしていった。そして、非常に給料が安い大学としての一時的な安定が出てきたわけです。

B　最低のところでもって……。

A　最低の段階で一種の安定が出来る。ところがそれがあまりにも最低であるために、あとで作った経済学部は伝統のなかで育ってきたわけでないわけだから―、その要求ももっともだと思うけれども―、もっと学生をふやさなければ教職員の生活も含めて大学は良くならないという考えにたって拡大政策が起こった。それで経済学部を中心として学生をふやし、その学生の授業料でもって文学部、仏教学部がまかなえるんじゃないかという考え方が生れた。そういう拡大政策が、そのころの経営問題のあつれきのなかで生まれてくる。こうした考えは経営者側よりも教授会のほうに強かったといえる。このような大学内の意向のレールに乗って拡大政策が行なわれた。しかし「バナナ事件」にみられたと同じように、経営者、および教授の一部分の無責任なやり方によって、拡大政策によるところの新たな借財がふえていく。そこでまた新しい危機が起こるわけです。森脇事件といわれているような…。

B　拡大政策の無理な面がいろいろな面に出た。

A　それから経営者の無責任性も問題の一つです。たとえばかっての堀・沖中などの実力者グループ…。

丸山　そして第三次、現在といくわけですね。拡大政策の恩恵（？）とすれば、大学の予算の規模がふえた。それから給料が上がった。これは確かによくなりました。と同時に、学校の設備も大きくなったしよくなった。健全財政のもとで給料がふえ、大学の設備がよくなったというならば、これは問題ない。ところが森脇事件のときの直接問題になった金額ははっきり覚えていないけれども。三億くらいだったんじゃないですか。四億五千万ともいうが、それくらいの借財でも立正大学が危いといって、緊張し対策に苦慮した。ところが現在になりますと、借財はなんと三十

億を超えている。もう、ちょっとわれわれにはわからない数字になっている。だが、立正大学のなかに住んでいる人暮らしている人は現状を危機としてはっきり受けとめていないかもしれない。森脇事件の当時ほど危機として受け取っていないかもしれない。というのは、給料がふえているし…

B 要するに、ある特定の人の責任に集約しうるような形で出てきていないからではないですか。

A 最近の立正大学は外からみれば、ある意味では繁栄した、安定した大学とみられている。ところが、三十億以上という借入金は、立正大学の能力を越えた借財じゃないかと思う。能力を越えたというのは、あとからこの問題は出てくるけれども、教団にそういうものをカバー出来る力が一応あるように見せかけてつみあげられた金額ではないかと思う。実際には教団がそれだけの力を組織し、結集することができるかどうか大いに疑問だ。とすれば、立正大学の学生の授業料でもって三十億以上の借財を抱えていかなければならない。そのようなことは教育の問題と考え合せれば事実上不可能だというくらいのことは誰の目にも明らかになっている。そういう事実認識にたって現在の問題を考えていかなければならないと思うのです。

B 第三次危機の実態はそういうことですね。危機というのはいつも最後だけれども、第三次危機の特殊性を少し考えてみよう。前の第一次、第二次についてはAさんのいわれる通りだが、第三次の危機、現在の危機の内容はいろいろな問題の側面があります。立正大学は拡大し、確かに学生数はふえた。熊谷校舎も出来た。学生がこなければなんともならないというのが第二次までだった。ところが、とにかく目いっぱい学生はきているでしょう。学生数はふえた。だから給料も上がった。それから校舎も設備も相当よくなった。熊谷の如きは、建造物自体が優秀な記念碑的な芸術作品であるといわれている。敷き地も実に広大ですしね。そういう一種の繁栄の様相を示しているところがいままでと現象的に違うところだといえます。実はそこにこそ危機の進行がある。一般的にいうとかって戦後の私立大学が経験してきた自転車操業ですね。学生はふえる、設備はふえる、後発大学として自転車操業にならざるをえず、それが危くなったという面がちょうど現在の状態なんじゃないですか。

学生数がふえたのは、ここ四、五年です。これは、大学進学者が非常にふえてきたり、ベビー・ブームとかというきわめて外在的な理由によってでしょう。くやしいけれど

も、立正大学がすぐれた大学になったからというものではないでしょう。内部にいる人間としてはくやしいことだしいいたくないことですが、きわめて外在的な理由によるといわざるを得ない。それで学生数が急速にふえていくなかで、経営規模が拡大していった。

そのなかで我慢をしていた教員たちが学生数の急増カーブに見合った待遇改善を要求している。そのさい非常に強い要求の目標になったのが給料の格差です。学部間における給料格差がそのときいちばん問題になった。現在の立正大学の教員の給与というのは決して他の私立大学にひけをとらないところまで上がっています。教員の給与が上がったことが経済危機を深めたということは必ずしもいえないだろうと思うけれども、やはりそのへんに無理があることは事実なんじゃないだろうか。

丸山　給料を上げてくれ、ボーナスをこのくらいは出してくれと組合が要求する。組合のほうでは「まあ、いずれ削られるんだから、この程度要求しておけばいい」と考えていると、経営者がそのまま認めていく。むしろ組合のほうが「大丈夫か」と心配している。それが実情でしょう。そこに何か問題がある。当然、経営上可能な線が検討されて組合と交渉して妥協しあう、それが常識的な経営者ですよ。それを、要求しただけ、「ハイ、けっこうでございます」というのは、経営者としてすでに問題があるんじゃないか。

B　上げてもらったほうからいうといままで実に悲惨な生活をしてきた。それはカーブの上昇に伴って給与改善は当然だろうと思うが、問題は、経営規模、ないし経営の実情にあった客観的な給与に対する経営者の姿勢というものがやはりなきゃいかん。給与を改善してくれという要求は特に格差ベースの被害者の側では強い。しかし、大学の経営状態いかんによるんだということは一言い訳になるようだけれども一いつでもわれわれは気にしながらいってきたわけです。まさしく給与に対する政策が不在である。だから出てきたところでのむ。要求を出したほうもびっくりするようなことが実際にあったわけです。

A　偽らざるところことしもずいぶん給与は上がった。それで給料を受け取ったときに二重の考えがある。一つは要求しただけ出しちゃってこれで一体学校がやっていけるのだろうか、と、もらったほうが驚く。もう一つは、「これで他学部（経済・経営両学部）との格差はほとんどなくなりました」という説明を聞くと、「いままでほかのものはこれだけもらっていたのか」という憤りがある。非常に

複雑なんですね。そこには二つの重要な問題がある。要求しただけのんでしまう経営者とは何か、はなはだしい給与格差を作っていたのは一体何か―という問題です。

丸山　給料が安くていいのではなくて、なんで今日まで長年にわたって安く押えて給与格差にあまんじてきたかということを明らかにしなければなりませんね。格差があることがわかっていても給料を要求しなかったわけです。なぜそれを長年押えて貧乏してきたか。それはやはり、宗立大学として立正大学をたて直そうという教団関係教員の意志があったからで、気のどくですが一般の教職員もそれに従ってきた。ところが結果からみればそうした善意はそれに乗って、管理者になっていった人の踏み台でしかなかった。完全に裏切られていってしまいましたね。

A　そういう問題にひっかかって、第二次の危機と第三次の危機の違いはなにかといえば、第二次のときには、立正大学をなんとかして宗門大学、仏教大学という特殊性を持った大学として立て直していこうという明確な目標をもってとりくむことができました。文学部、仏教学部を中心として強い意志がありました。

B　卒業生としても、宗内のものとしても微力ながら我慢しようという…。

A　卒業生や宗内のものに限らず建学の理念にもとづいた仏教大学という特殊性を備えた大学として再建できるのではなかろうかという希望があったからこそ、第二次の危機は乗り越えることができた。

丸山　第三次危機を前にして宗門人の幻想を断ったためにあえて正しく指摘するならば菅谷正貫学監が学内外にあった宗立大学理念再建のパワーを代表していた。そうした理念と善意の力に乗って経営者グループに入っていった。ところが指導的立場にたちその責任を負うと同時に宗門大学の理念を放棄し、一般大学化を目標とする経営主義的勢力と癒着してしまった。というところに第三次危機の発端があると思う。

A　第三次の特徴としては、一般大学と同じような形にもっていこうとしている。これが第三次の危機の本質的特徴じゃないでしょうか。大学側だけからいえば。そして、気がついたときには借財はものすごく大きい。この前の危機は乗り越えられたけれども、今度は乗り越えられるかどうか疑問なくらい大きな借財を背負っている。

B　給与問題はだれでも真剣になりますが、格差解消もやっとここ一年くらいのものでしょう。それまで相当な格差のなかで我慢してきている。例えば十年として格差分を

はじき出せば、一人でも数百万になるんじゃないでしょうか。われわれは宗立大学としての再建を口だけでいってきたのではなくて、一人一人が自分の生活を賭けてやってきたといえます。

丸山　そのことは外部から見ていた私が証言しなければならないことだと思っています。

B　ここ十数年をふりかえるとそういう思いがありますねえ。その間に学生もふえたし、現象的にはいい大学になってきた。しかし実はそのなかで危機が深化していったということについて、はなはだ釈然としないものがあります。やっとまともな給与になったと思った瞬間に、実は危機だといわれたんでは、一体われわれはなにをやってきたんだろうという思いがする。微力だから、なにをしたというような誇りもないけれども—ないけれども、やはり猛烈な腹立たしさ、いらだたしさを感ぜざるをえませんね。

A　財政の問題は確かに本質的な問題だし、給与の問題にからまってつい話がはずんでしまいますが経営の問題はあとで教団との関係で触れるとして、もう一つ、さっきBさんがいったように、後発大学の特徴が一つある。というのは、機構の問題なんです。事務機構は、戦前は知らないけれども、私が勤めてからの事務機構は、小さな大学から非常に大きな大学になったにもかかわらずほとんど変わらない。学生はふえたにもかかわらず事務機構はほとんど改善されていません。学部がふえてくればその学部独自の自治、学部の自治というものが出てくるにもかかわらず、それに付属する事務がないわけです。事務は学長に直結しているんだか、経営者に直結しているんだか よくわからない。これでは大学の 自治とか 運営が 成り立たない わけです。事務というものが非常にあやふやな存在であって、大学が大きくなったにもかかわらず、それに対応出来ていないんです。そのために、各学部の自治、ひいては大学の自治、そういうものを盛り上げていく裏方がない。

第二次危機のときまでは大学の規模がそれほど大きくなかったのであれだけの事務でもなんとかやれました。さっきいったように立正大学がほかの大学と違うんだという意識のもとで事務職員も機構をあげて協力していこうという気持ちがあったんです。しかし現在では運営を支える事務構造がくずれてしまって、かっての問題にとり組んだときのような意識も機構も生まれてこないんじゃないかという気がします。

丸山　あいまいな機構では大学を支えるだけの事務機構になりえないということと同時に、そのあいまいな機構が

あいまいなるがゆえの悪を生み出しているという面がある。例えば暴力団のような学生を私兵のように養うとか、部分的に明らかにされた理事会を無視して事業をはじめるとか、いろいろな面が出ているわけです。明らかになっているものもあるが、明らかにされない面がずいぶんあるんじゃあないでしょうか。そういう不合理性というものがいままで許されてきている。これもまた経営の危機と具体的に結びついている問題だと思う。

B　経営のほうにかかわって事務機構を問題にすれば、その合理化されない面での経費のむだはずいぶんあるんじゃないだろうかと思います。

A　理事会のことが出てきたけれども、理事会そのものも実は問題がある。現状のようなものを許している理事会が実はおかしいといわなければならない。第一次危機、第二次危機のころの理事会というのはある程度責任をもった発言をしていたと思う。いまの理事会はどういう発言をしているのだろうか。ここに大きな問題があるわけです。理事会の構成をみると、宗門関係の学識経験者、大学の卒業生というような形で編成されているけれども、立正大学が拡大され、非常に借財がふえ、とてもこれではいまの日蓮宗ではまかなえないんじゃないだろうか、という不安が理事たちにあるんではないでしょうか。理事会として立正大学に真剣に取り組む以上は自分たちが責任をもってやるという自信がなければならないはずです。ところが宗門関係の理事者にはそれがないのではないか。いまや逃げ腰であり、そうならざるをえない面もある。そうした事情のなかで、学識経験者と呼ばれている人のなかの金を動かせる人が理事長と特殊なつながりがあって、そう人が金を持ってくる。そうすると、「自分が金を持ってきたのだから他の理事は従うべきだ」という考え方があったかどうか知らないけれども、理事長はつい特定個人の要求をそのまま受け入れるという無責任性が出てくる。

丸山　具体的には昨年の宗会で、銀行から人がはいる問題について山本議員から、「要するに銀行管理じゃないか」と質問があった。「そうじゃない。これは金を持ってくるだけなのだからまかしておいてくれ」という理事長の答弁だった。本来そこから深く追及するべきだろうけれども、宗議会は紳士的に引き下がった。引き下がったのはやはり、あんまり追求すると問題を背負い込まなければならなくなるかもしれないということがあったと思う。昨年の宗会の段階で三十億といわれていた。もう少し経営の問題を考えていけば、金を持っているとか、持っていないの問

題ではない。責任体制の問題だと思うんです。その点を教団人は考え直して、あらためて取り組んでほしいと思います。

B　一般の教員のなかに「宗門なんてなんだ」、という意識が強くなってきている。結局、「そんなものはたよりにならない。やはり自分たちが考えなきゃならない」という意識が根強くあるわけです。

丸山　たよりにならないというけれど、一般教員が考えている問題の多くは大学を私物化するための考えではないだろうか。純粋に大学のために考えているとは思われない。要するに、主導権を握りたい、経営者になりたい。そこで大学を生かそうとつぶそうと勝手だと考えるというのが一般的なのではないだろうか。第二次の危機のときにハゲタカの如く売り方の協力者として現われるような人がいた。あれを見ていて、大学というものはなかなかむずかしいと思った。大学を立て直すために人が集まるのではなくて、主導権をとって売ろうとして集まるわけです。そういう状況がいますでに現われているんじゃないですか。しかもそれは大学のなかから現われているのじゃないですか。

A　教団のなかからも現われていると思うな。

丸山　第二次のときにそれを具体的な事実としてみせつけられたわけだけれど、これは全く許しがたいなあ。

A　現状の問題を考える場合経営の問題だけではだめだと思いますよ。学生の問題を一ついっておきたい。第一次第二次の危機のなかで一体仏教学部がどのくらいの役割りを果たしたか知らないけれども、立正大学の仏教学部というのは、宗立大学というものの理念的な支えになっていくはずのものだと思うしまたどうしても仏教学部でなければならないしそのなかの宗学科でなければならないと思います。ところが、第二次から今第三次の危機を迎えたなかで仏教学部は一体なにをしたか。どういう考えでいるのか、われわれからみれば全然わからない。それから、ことに宗学科というものがいまどのくらいの発言力を持っているのか。この危機に対して宗学科はどう発言出来るのかとなると、多分ゼロだと思う。ごたぶんにもれずいろいろな学生問題が起きている。これは丸山君に聞きたいが、竜谷大学大谷大学はやはり仏教大学ですが、宗門の宗学科といわれているそういう立場の学生が大学改革に向かって相当大きな発言をしているはずなんです。ところが立正大学においては、仏教学部の学生はそういうようなものに対しては全然発言をしない。それどころじゃなくて、新しい社会に適応しようとする態度すらなく、かえってマイナス的方向に

向っていこうとしている。

丸山　要するに、問題がふっとうしているなかの大学祭で美人コンテストをやるという仏教学部の学生のあり方に象徴されている観がありますね。

A　そこのところが本質的な意味で重大な危機じゃないかと思う。大学の危機であると同時に宗門の危機でもあるわけです。そこにつながっていく―。

B　つまり、現代に対して宗門の教学はどう対応することが可能か。これは一人一人が問題意識をもって、悩んでいる。大学の教員として、宗学にたずさわっている、あるいはそれに関連した学問にたずさわっている人々にとって抽象的に考えられる危機ではなくて、目の前にある危機に自分でぶっつかっていく外はない。つまり、一般社会の危機というのはある意味ではばく然としてとらえていますけれども、現に目の前で進行しつつある危機は大学の経営の問題ばかりではなくて、大きくいえば一つの文化の問題です。それにまともにぶっつかってみなければ教学の現代化は考えられないと思う。そういうものを回避してしまっては、抽象的な現代化という言葉だけのものになっていくのではないでしょうか。悪戦苦闘のなかから現実的なものが生れてくると思う。何年かかっても本当の教学を生み出さねばならない。出てくるはずなんだ。

丸山　宗学の問題が出ましたが、私の親しい先生たち一人一人はまじめに悩みとりくんでいますよ。宗学者として悪戦苦闘しています。しかしそれが大学の問題として反映されてこない。それから、大学の問題を正しく認識するだけのデーターを持っていない。それは一体なにか。それは仏教学部が象徴的個人のエゴイズムと価値観の支配を許しているという構造的な問題点であろうと思います。仏教学部の構造的な問題があるといえるんじゃないですか。

A　極言すると立正大学には自立した宗学科はない。仏教学部しかない。つまり、宗学というのは仏教学のなかでの一部分として、日蓮学という形で位置づけられている。客観的な仏教学はありますが、ところが、理念としての、あるいは世界観を打ち立てようとする宗学というものはいまの立正大学にはない。あるのは宗学者個人の努力によって成りたっている宗学であって、大学として存在してはいない。極論だけれども…。

丸山　宗学は仏教学的価値観によって圧迫し続けられたわけです。仏教を対象とした歴史学とか文献学的仏教学が主流を占めて、それが構造的に圧迫してきた。そんな状態で大学の理念を支える宗学が出てくるわけがない。

B　他の学部にいる一員としてみて、結局、仏教学部の先生方がもっと積極的に学部の壁を破って、自分で聞いて歩き、情報を集め、自分でやってみるという積極的な姿勢をとってもらいたいと思うのです。

丸山　ところが、宗学者のより主体化された教学の論文に対しては学問であるとかないとかやゆをとばし、宗門の仕事をすれば学問が荒れるとかいって、非常にいやらしく責められてきたわけです。そこでそういうバイタリティーを一人一人の宗学者が失わざるをえなくなっていった。それを復権させるのにはまじめな学生の力を得なければならないと思います。宗門人や学生がそういう本当の宗学者を支えていき大学問題にも取り組むという姿勢が出てこないと、一人一人の先生にただやれといっても無理です。そこらへんに教団人と学生の自覚の問題があると思う。

A　第一次危機、第二次危機のなかで、仏教学部がどういう働きをしたかちょっと疑問だけれども、特定の先生たちはある程度やっていた。ところが第三次危機のなかにおいて仏教学部に一体力があるのかどうか全然わからない。それは仏教学部の支配構造とつながっている問題だと思いますね。

B　学生の若い力というものにも期待しなければいけないわけですね。

丸山　形のうえでは、仏教学の学部長が学長になって大学を担っているような形になったわけです。宗門の人たちは宗立大学としての象徴的な意味で、学長が教団人であるということである意味では納得し安心しているだろうと思う。ところが、この学長が実現するプロセスをみると、実は大学を一般大学化しようとするところの波に乗って実現した学長なのですね。そこらへんのことを宗門人はよく考えて欲しいと思います。

A　宗門にとってこわいのはもっと本質的な問題です。話が戻りますけれども、立正大学の設立の理由はよい坊さんを作ることから始まったわけです。旧制大学の間は、よき宗門僧侶を作るという理念がまだあったと思うのです。それが今、総合大学になったにもかかわらず宗門として立正大学に要求するものはいつまでたっても、よき僧風教育だけなんです。そういう観点からしかみていない。立正大学がよき僧侶を作ることだけで宗門が満足していいかどうかという点にひとつの問題がある。

しかしともかくも宗門が、よい僧侶、よい僧風教育を望んでいるにもかかわらず、立正大学の仏教学部あるいは、宗学科がさっきいったような状況である。そのなかで宗門

子弟がいっぱい勉強しています。それが次の教団をになう人たちです。宗門の立場からみれば、ほんとうの意味の教団をになうような学生があのなかでは出来ない。いまの仏教学部の状況は宗門人としてもっともっと真剣に憂慮していい状況です。そういう憂慮をしなければならない状況を作り上げたのはなにかといえばさっきいったような客観主義的仏教学主義が立正大学に横溢しているからだといえます。それで、宗学までも客観主義的な仏教学科の圧力に屈し、それに引きずられてしまっている。このことが非常に大きな問題です。大変いいにくいことだけれども、死んだ人のことをいって悪いのですが、望月歓厚先生が文学博士をもらった。望月先生は仏教学者や宗教学者じゃない。宗学者なんです。宗学者が文学博士をもらうことは喜ぶべきことか、悲しむべきことかわからない、と、実はいいたいんです。立正大学にとって、あるいは望月歓厚先生個人にとっては、これはいいことだし、双手を挙げて喜ぶべきことだけれども、ただ、宗学者にとって文学博士を取ることが一つの目標になったとすれば、これは喜ぶべきことではない。つまり、博士号というものは、客観主義の学問のアカデミズムのうえに立ってあげられた学問の業績にあたえられるものなんだから、本来の意味の宗学に対して博士という称号がありうるかどうか。それでいいのだろうかということがある。それがもし後進の目標になっていくとするならば、そういう空気を作り上げていったものは一体なんなのか、もういっぺん考えなければならないと思うのだけれども…。

丸山　同感ですね。

具体的なことばかりいって問題を低次元におろしてしまうようですが、仏教学科の先生の席をふやすために、宗学科の先生の席を短大教授に移していくという操作が行なわれていますね。仏教学科を膨張させて宗学科を圧迫している。これはゆゆしき問題だと思う。現状でも宗学の先生が短大に多く席をおいている。そんなことは宗門の人は信じられないことでしょうね。

A　もっと変なことをいえば、仏教学科というのは客観主義の学問です。だから、一般のだれでも仏教学を聞きたい人は来てもいいわけです。だれでもくる可能性はあるはずです。宗学科は別で、宗門子弟の教育になりますが――

しかし仏教学科の学生は一体、何人いるのか。学生の数を問題にはしたくないけれど、文学部のいちばん少ない一学科の学生より少ないんです。それはなぜなのかということを考えなければいけない。経営主義的な意味ではなくて

自分たちの仏教学に対する考えを反省しあらためなければいけないと思いますよ。

丸山　経営の問題でなくて、数が相対的に少ないからということは問題ではなくて、少しでもいいけれども、その学生を率いて大学を理念的にはリードしていかなければならない立場にありながら、それを果たしていない。とするならば仏教学部はどうなっているのだということに対して宗門人はもっと発言しなければいけないと思う。僧風教育という点からみても、基礎づくりは一応了わらせなければならない。たとえ四年制を六年制にしてでもそれだけはやらなければならない。宗門の将来をになう人を、一年に二人でも三人でもいいから、生み出していくという仏教学部でなければならんと思う。ところが、客観主義的な価値でしかすぐれているとは評価していない。もちろん、仏教の学者を作ることも必要だけれども、しかし、宗学者はあまりにも育たなすぎる。優秀な学生はみんな仏教学へひきづられてしまう。それが現状ではないか。

B　宗学そのものも大切だし、宗学の後継者の養成も大事だ。それが十分行なわれていないとするならば大変困ったことだと思う。教育機関として大学があるので、宗門全体の教学の興隆について大学の専門の人がリーダーシップをもっと発揮することが望ましいと思う。一年一回の教学大会というものじゃなくて、まさしく日蓮教学のセンターとしての役割を果たす仕事がたくさんあるのじゃないかとかねがね思っているんです。相当多忙にはなるだろうけれども、もっと開かれた世界へむかって活動の分野を拡げてほしいと思う。

A　それは確かにそうだ。

丸山　若い学者は外へも出ることが必要だと思います。外に出るということは宗門の仕事をもっとするということでもいい。最近は仏教書ブームで、日蓮聖人や、法華経に関する書物がたくさん刊行されています。しかし、立正大学の先生は少しも外で書いていない。外で書くことは悪いことだというふうな権威ある評価が仏教学部に横行している。これはやはり問題じゃないかと思う。日蓮聖人についての専門家といえば、外の学者しか一般人は知らない。日蓮聖人を専門に研究しているはずの大学の先生が一向に本も出さないし、従って発言の場所もあたえられない。こんな状態でこれでいいのでしょうかね。それを押えているのは一体なにか。客観的仏教学アカデミズムだと思う。それも少し時代遅れですね。東大の印哲系の人たちがしている仕事がそのままいいことだとは思わないけれども、啓蒙

的なものも書く自由はあたえられていますよ。東大でも許されているにもかかわらず立正の場合は許されていない。自己規制が働いているわけです。

それから「大法輪」の問題ですが、学長は「大法輪」へ出かけていって座談会で「立正大学に問題はありません」といっている。これほど大きな問題を抱えていながら、問題はありません、と外でいっているということは問題ですね。あれほど苦労してきた立場からいえば…。

B 事実そういう声が出ている。実際に、日々学生に接して苦労している事務の人までがそういうことでいいのだろうか、と批判しているのを私も聞いています。それは、対外的なゼスチュアとしてそうなんだというような言い方もあるだろうけれども、この時代にこれほど大きな、大学をゆるがすようなことを経験してきての配慮だとすれば、それは無用だといいたい。各宗門大学の学長が集まったときにはもっと率直に問題を披瀝し合って、お互いの問題点を追及する姿勢がなければ教員や事務職員が納得してくれないばかりではなくて、やはり学生自身も納得しないですよ。それが俗にいう〝一事が万事〟になっているんではないですかね。

丸山 宗門へ来ても、宗会へ出ても、「なにもございません」という姿勢でしかものをいっていない。これじゃ宗門として手を貸すわけにいかない。「問題があります。ことしは大変でございます。宗門の力を借りてこの危機を乗り切りたい」というのが大学の責任者のことばでなければならない。宗門の力を借りなければ大学はどうもなりません、というのが、現実でしょう。「大学は問題ございません」ということではすまされない状態だと思う。

A そこに問題がありますね。

丸山 話は別だけれども、立正大学の先生のむすこさんがある大学の大学院を出たので立正大学へ就職したい、といって依頼にいった。ところが、「立正大学には入れられない。創価大学なら世話しよう」という返事をもらったということが最近あった。これが日蓮宗の宗門大学の学長で僧籍にある人が言えることであるかどうかが問題ですね。立正大学の現状、あるいは客観主義の学風に支配された仏教学部の現状を象徴している言葉というべきでしょう。

B 初めて聞く話で驚きました、もののけじめはもう少し考えてもらわないと困る。疑惑を招くようなことはそればかりじゃないと思う。日蓮宗の気質として保ってきたものを、こういう時代には改めて自分たちの内面からもう一度火をかき立てて確認したいと私なんか思っている。それ

が特有の偏狭さというものであってはいけないけれども、祖師以来の法華経信仰に対する潔癖なまでの信仰というものをわれわれは親から教わってきたし、われわれもこの年になるまでいろいろなことがあったけれども、腹の底のどこかに、がんばらなければという気持ちが養われてきたと思う。個人的な経験だけれども、私なんか事実そうだった。そういう点から考えると、もう少しそのへんはお互いにきちんとしたいと思う。宗学なら宗学をやるという気持ちが乱れていくんじゃないですか。

A　そんなところで、そろそろ仏教学部の問題は別として、立正大学の理念というものを考え直す必要があるのではないだろうか。もしも立正大学の建学の理念というものがこれからの方向に合わないとすれば、立正大学をわれわれ考えてもしようがない。まだまだこれから学生の自治の問題、大学の学生参加ということが行なわれていくと思うけれども、そのなかでなおかつ建学の精神というか、立正大学の設立の理念が生きていくとするならば、もういっぺん理念に立ち還る、原点に立ち還ることが必要だと思う。立正大学の建学の精神は、これからの時代に十分に必要なものであり、これからの人間の姿勢として持っていなければならないと思うけれども、いまの立正大学には、現状を語ってきたように、理念はどこかにいっちゃって、単なる学校経営主義に堕ちてしまって、経営主義のなかでの発想でもって動いている。理念は空洞化して、ただ言葉だけがあるだけです。ナンセンスなことには、ほんとうに立つかどうかわからないけれども、仏教学部の学生が建学の精神を石に刻んで図書館のところの壁にはめ込もうという話がある。そうしたら、「壁にはめ込むと図書館の美しさがダメになるからほかにしろ」とかいわれたという。建学の精神をはめ込むと美しさがこわれるという話もどうかと思うし、空洞化してしまって、理念もなにもないのに建学の精神の碑だけを建てようというようなこともナンセンスだ。もういっぺん立正大学の理念についてわれわれは考え、今後どうすべきか、今後の方向なりを考えなければならないんじゃないか。

丸山　形に現われてしまった理念の喪失の問題が出ましたが、もっとさかのぼれば、立正大学には礼拝堂がないという問題もあります。

B　問題を一般化しちゃうかもしれないけれども、宗門が大学を持つ意味ですね。宗門の側からね。そういう問題を考えてみたいと思う。

A　賛成だ。

B　つまり、一つの宗門が文化的な施設として大学を持つことはいろいろな意味がある。常識論で答えられることでもあるけれども、その点をもう一つ考え直して宗門の人たちが腰を入れようという気持ちになってほしい。現状では、現実的な資本主義社会のなかだから大学を持っているということは、金がどれほどそこに注ぎ込まれているかということが一つあるだろう。もう一つは、その金は動くものだから、現実にないとしても、動きというものに率直にいって理事会はもっと責任を持ってもらいたい。それがまず基本的にはお願いとしてある。またやはり宗門の文化的事業はさまざまな面においてなされているだろうけれども大学の権威が今日問題にされてきたにしろ、とにかく大学はまだ役割りを改めて負い直さなければいけないと思う。あり方が問われているけれども、なくていいものではないと思う。そこで、立正大学という非常に伝統のある大学を心情的になるけれども、もっと大事にするようなふん囲気を宗門全体として持ってほしい。

A　いまの意見に賛成だ。宗門が大学を持つ必要があるかどうか根本的に考え直していくべきでしょう。旧制の間はよき僧侶を養成する、という理念が非常に強かったと思う。ともかくこの大学を出ていったものが現在の宗門を背負っているわけです。ところが、立正大学が総合大学になるところで、そこで宗門はもう一度、立正大学を持つ必要があるかどうかを考えなくちゃいけなかった。否定の意見からすると、持つ必要がないというならば、僧侶教育を非常にささやかな規模で別にやればいい。

それで出来るかどうか。やはり、教団を支えていくのはその根本には教学がある。教学というのは、それだけを温存して、温室のなかでつくろうとしても育たない。危機の社会に対応し、危機の環境のなかにみずからを置くことによって、現在の文化を批判し、それに新しい光を投げかける意味で教学は発展するのだと思う。

僧侶教育だけであっては宗学は発展しないと思う。いまのように総合大学になって、ほかからのいろいろな学問の刺激を受け、そこで教学はもっと発展をする。しかも、教団の根本を支えるものはいつも教学であり宗学であったと思う。いままでの歴史をみても、宗学や教学を軽んじた教団、つまり、宗学よりも政治のほうが上回った教団は長い歴史のなかで崩壊していった。教義がしっかりしていて、教学が発展していくような宗教は教団としても当然発展してきた。その意味で、いまいったように、総合大学のなかに宗学があることは大いに意味がある。だから、総合大学

を教団は持つ必要があるのか、ないのか、と問われれば、持つ必要があると私はいいたい。

ただし、僧風教育の大学としてではない。では一万四千の学生に対して一体なにを教育するのかといえば、日蓮精神、法華経精神がこれからの時代になお光を投げかけるものがある、という確信のもとに教育をしていく場であると思う。一般の人たちを教育していく場なんだ。だから、立正大学を教団が持つのは単なる体裁、体面ではなくて、非常に大きな布教の意味がある。しかし卒業生すべてが日蓮宗の檀家・信者になる必要はない。日蓮精神を持った人間これからの日本を背負う人間を作り上げていくということで教団は大学教育ととりくまなければならない。信仰者を作るということと同時に、それよりももっと広い意義があることだ。そういう考え方をいまの教団の人に持ってもらいたいと思う。考え方の転換をしてもらいたい。

立正大学を卒業してもちっとも寺の役に立たない、というような批判だけでもって喜んでいるようでは、宗門はしようがないと思う。なかにいるものはこれほど悲しいことはない。教団からも見放された立正大学は一体なにをしていいのかわからない。教団が立正大学をなおかつ持たなければならないという意味は、いまいったような教育がなされなければならないと考えるからなんです。

B 具体的には宗学科の充実というようなことにもなるだろうし、さらに、各パート毎に専門・専門を持って勉強している宗門の出身の先生がさらに活動しうるような条件を考えることです。さっき出たことと関連するけれども、実は立正大学のなかですら積極的な布教活動がなにも行なわれていない。ご存知のように、第三文明研究会はすでに二百名を突破しているとの話もある。キリスト教研究会も出来ている。それに対して、日蓮宗の側の学生から一般の学生に働きかける活動は実はなにもない。例えば、理念の客観化、普遍化ということですと、一部の人たちはすぐ講座を作るというようなことを考える。だけれども、私は必ずしも賛成じゃない。つまりないよりはいいだろう、ということだ。しかし、講座を作ったらなんとかなると考えるのはおかしい。そういう点が安易だと批判されたわけだ。私が期待するのは自主的な活動なんです。学生も教員も協力して自主的な活動としていく方向で何か考えるべきじゃないだろうか。極端にいえば、なんで第三文明研究会なりキリスト教研究会の跳梁にまかせるのかと思う。

丸山 具体的な問題としては、熊谷には仏教学部の学生は行かない。全く一般の学生しかいない。ここではサーク

ルの起こりようもない。ただ創価学会の第三文明研究会だけの跳梁にまかせる状況にある。しかも宗学科、あるいは仏教学部の先生は「なるべく行くことをやめよう」という申しあわせをしている。仏教学部教授会がそういう状況ではね――

A 熊谷を卒業して大崎に来る。だから学生の半数は熊谷のものが来る。ところが、熊谷には仏教学部の学生もいない。仏教的なふん囲気が一つもないところからくる。そうすると、ますます一般大学化していく。熊谷が充実すればするほど一般大学化していく。

B 非常に熊谷は重要なんですね。

A それを認識していないんですよ。

B かねがね、熊谷に礼拝堂を作れということは出ていた。それは望ましいけれども、熊谷を主としてやっている教養部に宗門出身者は何人いるか。教員のうちでは二、三人じゃないですか。それも教養科目ですから、直接仏教の専門ではない。教養科目のなかに仏教に関するものは一つだけなんだ。だから、例えば礼拝堂を作ったとしても、教員の側で積極的な意欲を持って運営しなければナンセンスだ。建て物があって魂がはいらない。

A 礼拝堂が熊谷に必要かどうか認識させることがはなはだむずかしいことはよくわかる。それでは宗門出身者だけがその問題を進めていくことができるのかというとその点も疑問がある。立正大学の理念なり日蓮精神というものは宗門出身者でなくても十分に理解し、納得し、担っていけるものだと思う。いままで、宗立大学とか、日蓮精神とかいうと「南無妙法蓮華経」をとなえることであったり、お経を読むことであると考えてきた。そこに問題があると思う。いくら「南無妙法蓮華経」を唱えても、「御遺文」を読んでもそれだけで日蓮精神なるものはつかめるものじゃない。丸山君がいったように、日蓮精神とはなにか、ほんとうの意味の法華経の精神とはなにかをみんなで考えなければならない。一体、日蓮はどういう姿勢で社会に対していたのか、その問いかけが一つもなされていない。はなはだ勝手な考え方だけれども、日蓮の宗教は「安国論」に始まり、「安国論」に終わるとよくいわれているけれどもそれが日蓮の精神であったとすれば、なにを見、どこを向いていたのかそのことをつかまえなければ理解できないはずだ。安国論を読めばすぐわかるように、社会は混乱し、飢餓のために人々がごろごろと死んでいく。そういう死んでいく人たちを見ながら、「どうしたらいいのだ。これは何事か。この現実をなんとかしなければ…」と自からに問

うところから始まっていったと思うのです。その日蓮のほんとうの姿勢というものがはっきりと大学の精神のなかに出ていっていいのじゃないか。社会との対応というか、そういう姿勢—私は宗学については専門家でないからそんな簡単なことしかいえないけれども、日蓮の姿勢は一体なんだったのか、ということを考えること、それが日蓮の原点へ帰ることになるんじゃないかと思うんです。

丸山　全く同感だ。

A　それを大学の人も教団人も忘れていやしないだろうか。そういうところから考えたときに、いまの教団のあり方はいいのかという質問も出るだろうし、疑問も出るだろう。立正大学のあり方は何か、ということも出てくる。

B　大きくいえばそうだ。ただ、大学という小さなところに焦点を絞れば、やはり宗門が、「大学と一苦労してみよう」という気持ちをもういっぺん持ってもらいたいと思う。例えば、経営の問題をだれかにまかせっぱなしにするのではなくて、とにかく悪戦苦闘してみることをやってもらいたい。私なんかそういう注文づけをする資格があると思う。立正大学を卒業して、立正大学に奉職してきたその経過——戦後の歴史は全く悪戦苦闘の歴史だ。私なんか、能力のなかったという点もあるけれども、三十代という大切な年代を大学の第一次、第二次の危機のなかで全くすり減らしたという感じがある。だから、そのなかで残念に思うのは、宗門を代表している理事が、私どもといっしょに本気になって大学問題ととりくんでくれなかったんではないかという思いが残っています。理事会は年に何回か開かれ、集まって質問する。例えば、熊谷に今度新しい建て物を作るというような話があったときに、それが立正大学の経営上の命取りにならないか、というような質問をして、「そんなことはございません。自信を持っています」「ああそうですか」で終わってしまうような、そういう理事会では困ると思う。だから、実際に大学に問題が起ったときどこへ相談していいのか、さっぱりわからない状態でしょう。結局、教員というのはある意味では宙ぶらりんの位置にある。つまり、経営と教育の中間で宙ぶらりんになってしまう。そういう不安感を持っていた。だから宗立大学の理事会のあり方は相当考えなくてはならないと思う。いまの立正大学の危機はいろいろあるけれども、直接は経営の危機でありやはり責任を問われるのは理事会です。

丸山　現在の大学の危機状況をどこまで理事会が認識しているかわかりませんが、少なくともリアルに現状を理解すれば、これは進退を決しなければならんような事態で

す。責任を取るという立場で考えれば。いままでのように経営主義で大学を拡大して、立正大学としての理念をたな上げにしていくという方向になお進もうとするならば、宗門の理事は全部総辞職してしまえばいいと思う。そして全く新たに日蓮精神にもとづく学校をつくればいい。

A　いまの立正大学を「宗立」の大学と言うことをやめてしまえばいい。

丸山　勝手におやりなさい、ということだ。それでは相ならんというならば、ここで一歩踏み込んで大学を宗門大学として再建する方向へいかなければいけない。Bさんがいわれたように、三十代に学問しなければ学者になれないという決定的な時期、その年代を立正大学を宗門大学としてたてなおそうという気持ちだけで表には現われてこないかげの仕事をどれだけさせられてきたかわからない。ところが特定の人の学内の地位とひきかえに、宗門大学ナンセンスという形で踏みにじられてしまった。しかし、残されたわれわれはなお宗門の大学として再建してほしいという願望を持っている。

そこで、いまの理事会がこの問題に取り組むことが出来ないならば、次の世代が、理事でも学長代理でもいいからなんでもやって再建していくほかない。だれかがやってくれるだろう、というのがいままでの大学の体質だったと思う。とにかく責任がどこにあるのか、文句の持っていくところがないのが現在の立正大学の体質です。このような無責任体制なるがゆえに危機は危機として独自に展開していき、どうしようもないところに転がり込んでしまったと思う。責任を取るという人が現われなければ現状を打破できないでしょう。宗門人の誰かがやらなくてはならない。しかし人はそうたくさんいるわけではないので、Aさんにせよ、Bさんにせよ、批評家としてではなくこの問題ととり組んでもらいたい。そうした決意のうえにたった討論でなければ今日の話も空論に終わる。

B　期待は受けて立たにゃいかん、とヒシヒシと感じます。いまの大学に職を占めていることの意味の重さを日ごろから感じているんです。事実問題として、何回かの危機を経験してきて、率直にいわせてもらえば疲れはてたという感じがある。例えば学長が変わるといった経過のなかで個人の人間関係を越えて一つの挫折感を感じているわけです。改めて考え直して、人生の後半期にいかに生きるべきだろうか模索しておるところだ。そのご期待はわかるし責任はなんとかしなければいかんと思いますが、これが危機と戦ってきた何人かの人々の実感じゃないか。私だけじ

やないだろうと思います。

A　それはよくわかる。と同時に、確かにだれかがやらなければならない。そして、教団が社会のなかに存在している意味を日蓮の精神の原点に戻って考え直してもらいたい。教団のなかでそうした反省が行なわれることによって教団は立正大学に対する責任を、もっともっと明確に持つことが出来るようになってくる。しかも、行動になって現われてくる。もちろん大学は日蓮精神の原点に戻って法華経精神の現代における姿勢というものを探求していく。それが宗立大学、宗門大学ということであり、仏教大学としての特殊性はそこからしか出していけないのではないかと思う。

B　いままで話してきたことの結論になるかもしれないけれども、要するに宗門のエネルギーを大学の内外でいかに動員するかということだ。そのエネルギーを妨げているものがあるならば、それをのけなければいけない。へたばった人はまたみんなで手を貸して、助け起こして、励ましてみんなで進む。一人や二人の力でなんとかなるようなものじゃない。大学自身の規模だって非常に大きくなっている。やはり多勢の力をあわせそのなかから、それぞれが各パートを担当していかなければならない。

A　立正大学の問題を語っていくうちに、やはり教団の現在の問題も同時にそのままつながってくる。教団の改革と立正大学の改革は平行して行なわれなければならないし問題は同質であるという気がする。

丸山　私は、教団改革に関する限り、大学は実験場であると同時に拠点だと思う。だから立正大学が教団にとって重要だと思う。Bさんのいだいた挫折感というのは、一生懸命やってきたにもかかわらず理念が特定の人間のエゴイズムによって食いつぶされてしまったむなしさだと思う。だけれども、その状態から早く立ち直ってほしいと思う。理念を生かしていくのはわれわれの立ち直り以外にない。青春を埋めた跡が墓標も建たずペンペン草という状況、いいかえるなら大学が解体してしまえばわれわれは死んでも死に切れない。

B　私個人についていえば宗門人で立正出身という立場で自分の専門を選んだ意味さえも現在のような立正大学では意味がなくなってくる。それは私のことだけいっているのではなくて、一人一人にあるんじゃないか。Aさんならば Aさんの選んだ専門をやる意味がない。聞き手もないし自分の学問を大学のなかで生かす道もないということになっていく。そういうことが、一人一人専門も違えばそれぞ

れなんだけれども、自分の問題としてやはりある。

丸山　それはそうですよ。宗門の大学としての立正大学を考えたから選んだそれぞれの専門なんだから。

B　自分も宗門人であるし、大学としてもこのような専門をやる必要があるだろうと思って選びもし、勉強もしてきた。それが生き甲斐だったんだ―。

丸山　それぞれの学問によって大学を支え、宗門を支えていこうという意欲があったからこそ選んだのだと思う。それはここにいないいろいろな先生方もそうだし、いわんや宗学の先生は大学で宗学を勉強することによって宗門をになっていこうという決意を持って学者になっていったと思う。ところが、そういうすべての学者・研究者としての実存的なものまでも含めて崩壊してしまうんじゃないか。

A　食いつぶされていく。

丸山　そのむなしさが大学をおおっている。

A　私も同じような挫折感を持っているが、それと同時に、学長は大法輪の座談会で問題はなんにもないといっていたけれども、事実大揺れに揺れ、そのなかで仏教学部の学生からの発言も意示表示もなんら行なわれなかった。動かなかった。あれが次の教団を背負っていく人たちです。どっちかといえば、われ関せず、という顔をして遊んで歩いていた。そこで教団を考えるとほんとうに挫折感を持たざるをえない。大谷や竜谷の学生たちはどうなの？同じですかね。

丸山　それが全然違うんです。やはり寺院出身の学生がおり、宗学であるとか、歴史学であるとか、国文学をやったり、いろいろな専門は違っても宗門子弟、要するに寺のあとを継いでいくという学生諸君が自分のからだごと大学問題に取り組んでいる。竜谷大学の場合はやはり立正大学と同質な問題がある。というのは客観主義的な学問、仏教学とか歴史学によって宗学を押え、近代合理主義が大学を支えてきた。そして、俗流マルクス主義的な学者がそのなかで跳梁していた。従って民青が非常に強いということによって起る竜谷大学の危機は深いものがある。どういうふうな解決方法が出てくるか知りませんけれども、立正大学のいろいろな状況とは別な非常に厚い壁を前にして学生は一人一人呻吟しているわけです。寺院出身の人たちは。この大学の問題は真宗の問題であると同時に、真宗学の問題であり、親鸞精神の問題であるというふうに、問題をはっきりと認識しているわけです。具体的にいえば、竜谷大学の場合は深草の校舎は全共闘が封鎖し、大宮校舎は代々木系が占拠して、全共闘系の学生は一歩も入れない。来れば

双方の暴力的衝突が起こるという状況がつづいていた。そういう状況下で私の会ったのは全共闘の学生と、竜大変革推進会議というところの学生です。グループが全然違いますけれども、変革会議の人たちは、竜大に親鸞精神を復活するにはどうしたらいいかという問題を教団の改革とつながっている一つの問題だというふうに認識しているわけです。ところが全共闘系の場合は、教団の問題とか、親鸞精神の問題に拡大するとわれわれの手に負えない、ということになる。要するに一般大学の問題として解決したいと考えていたのが全共闘系です。代々木系は大学の主導権をここで取ろうという野心で動いている。教団と大学当局は部分的にはいろいろな懐柔策を考えていたようだけれど少くとも立正のようにやくざ学生を使うようなことはしていないし、大学改革の案を出しています。それぞれの力が均衡しているために具体的解決の方向になかなかいけない。しかし、その揺れ動いている問題のなかで親鸞精神の問題としての大学問題を考える姿勢があった。親鸞精神の問題なんだということが学生のなかから出ているということだけで立正大学とは全然違う。立正大学はいくら揺れ動いても立正大学の問題は日蓮精神の問題だと学生はとらえていなかった。暴力学生と全共闘系の学生が衝突することを日常茶飯事にみていて、そこで彼らは宗教の問題として大学問題をとらえられなかったということができる。まして、仏教学科の先生がとらえられるわけがない。これでは現代に日蓮精神の有効性を問うことにはつながってこない。

大谷の場合はやはり民青系が強い。衝突もある。大谷大学の大学祭で管長問題を考えている教団の青年グループと学生グループの共同主催で真継伸彦氏とシンポジュームの報告をやらされたんですがその看板も代々木系にたたきこわされるという状況があった。だけれども、とにかく管長問題を含めた教団の問題と大谷大学の再建の問題を宗門子弟の学生はひとつの問題として考えている。一般大学の問題ではない。大学の問題は同時に宗門改革の問題である。ともかくそう考えている。

竜大にせよ、大谷大学にせよ、真宗をになう連中はここから出てくると思う。親鸞の精神を継承するためには教団を出なければならないという考えの学生の意見もあったけれども、そうではなくて教団のなかに踏みとどまって、そのなかで問題を解決していく姿勢でなければならないんだと私は話してきたんです。ともかく自分の悩みとして悩んでいる。そういう真宗の青年や学生をみて、日蓮聖人は泣いているだろうと思った。親鸞にして後継者がいるのに日

蓮聖人にはないんじゃないかということです―。立正にあるのは創価学会の学生の研究会ですからね。現仏研・プルナの会・探遺会などもありますが、あの連中はなにをやったか。なにもやっていない。問題を煮詰めて認識することも出来なかった。大学全体の問題状況をとらえることさえも出来なかった。

A　それすらしようとしなかった。そのほうが大事だ。

丸山　問題から逃げている。宗学、あるいは宗学科をどうするかとか、仏教学なり仏教学科をどうするかとかいっても、講義がつまらないとか、坊さんになる自信がもてないとか、個人的にはいろいろ文句をいっているけれども、ほんとうにどうしたらいいのかと自分の問題としてとらえその問題のなかに大学問題もあるんだと考えない。まして教団のことなど考えていない。自分が寺の住職になるということの責任を自覚していない。ここにやはり日蓮宗としての問題もある。大学だけの問題じゃない。宗門の子弟がいまそういう状況で大学で学んでいることは宗門の将来が非常に暗い。ここでなんとかしなきゃ、このままズルズルといったら大変なことになると思います。

A　宗門も困るし、大学もつぶれる。日蓮精神はそこではもう日本からなくなってしまう。

丸山　ともかく人間を媒介にしていく以外にないですからね。

B　なんといっても結局は人間の問題に集約されます。

丸山　真宗の場合は、宗学をやる人の方に優秀な人材が集まる。宗学に魅力があるんです。立正では宗門のすぐれた子弟は宗学へ行かない雰囲気がある。やはりエリートが集まるところでなければ困る。

A　仏教学のほうがエリートのような顔をしているのは全然おかしい。宗教学生というとおかしいが、教団とか宗教にかかわりのある学生がほんとうに真剣に現代の大学問題や学問の本質の問題に取り組んでいる。これは仏教に限らない。キリスト教でもそうです。明治学院、同志社、青山、みんなこれから牧師になろうというキリスト教の青年たちが、いまの大学の現状に対して取り組んでいるわけです。ところが、立正大学においてはそういうような青年が真剣に取り組むことができないでいる。むしろ逃避している。非常に悲しい。

B　とにかく学生運動もいろいろあるけれどやはり教員の立場としては大学を大事にしてほしいというのが基本的な願いなんです。そこからものを考えようと思っている。立正大学でも、一人一人の大学人がほんとうに大事にして

ほしいと思う。それは、なにもいまあるものを大事にするというのではない。大事だからこそなんとかならないかと思うのであって、宗門の人たちも、もっと学生に大学を大事にしろと自信を持っていい切っていない。せめて自分を大事にしようというような形になっていっちゃう。これは狭い殻へ閉じ込もるということで、いいとは自分でも思っていないが、なかなか自分自身の、思考が展開していかない。やはり立正大学を大事にしよう。簡単にいえばそういうことを特に宗門の人々に訴えたいところだ。

丸山　花園大学でやはり闘争があった。私の行ったときに、そのグループがどういう立場で大学の問題と取り組んでいるのか知らないし、ほんとうにそのことが問題を解決するための行為であるかどうかわからないけれども、形だけでいえば、大学へはいると、封鎖された校舎の前に十名くらいの学生が座禅を組んで校舎に向かって断食をやっている。なにをやっているのか、と聞いたら、「われわれはどういうふうに問題を解決していいかわからない。しかし学生がとにかく花園大学に来てくれなくては解決にならない。ここで顔を合わせなければ問題を討論することさえ出来ない。だから、花園大学の学友諸君がここに来てくれることを願って、われわれと討論してくれることを願って断食している」という。宗立大学の精神はまだここにあると思いますよ。その内容はわからないけれども、とにかく形としてはあるわけだ。十人くらいで墨染めの衣を着て、座禅を組んで断食している。「学友よ帰って来てくれ、討論しょう」といっていたのを見ると、日蓮の精神はすでに立正大学にはかげも形もなくて、案外臨済宗あたりにあるんじゃないかと皮肉のひとつもいいたくなるんです。

B　そういいたくなるな（笑）立正大学は戦前から決して〝騒動〟がなかったという大学じゃない。何回かにわたって学生自身のリーダーシップのもとにいろいろな事柄があったと聞いている。しかし、戦後はなにもないじゃないか。その意味では「立正大学はほんとうになにもございません」だ。これは実に摩訶不思議だと思う。宗門子弟のエネルギーは一体どこにいっちゃったのか。

A　どっかへいっちゃったな。それは教団の責任だと思う。

B　坊さんになるには立正大学へ行くのがいいというくらいではしょうがない。

A　それと、ここではあんまりいいたくないけれども、教団自体が悪に対する対応の仕方が悪い。立正大学に第一次、第二次危機を招いてきた遠因は、教団の方にもさまざ

まな状況があった。それに対して教団のなかの良心派が、教団の不名誉になるからとかいって、悪人をそのまま生き残してきているでしょう。それ自体が、日蓮精神どこへいったのか、ということなんだ。宗門の子弟、学生がこうなっていくのは当たり前のような気がする。

B 教団人が教団自身に対しての取り組みの姿勢が十分でない。その一つの現われですよ。とにかく、その現われたいろいろな問題が無責任なまま放置されている。

A もういっぺん日蓮の姿勢に戻って、悪は悪とし、正義を尊び、邪悪を除かねばいけない。日蓮精神からみて正義であるか邪悪であるか、そういう建学の精神をとりもどすべきだ。世間で通ずる正義、邪悪ではない。日蓮精神からみて真実は何か。真実に対して至誠を捧げようというのである。正義とは何か、邪悪とは何か、正義を尊び、邪悪を除く。そういう意味で和平を願って人類に尽くそうというのが建学の精神です。それが、世俗の世界での真実であったり正義であったり、邪悪であることと同一である筈はない。世俗の正義というのは何かといえば強いものには従っていくのがえてして正義と呼ばれるものの正体です。日蓮の正義はそうじゃない。立正大学においてはその立場での正と悪の問題がしっかりしていなければならない。

B お互いに問題をもってぶつかり合ってみることが必要ですね。つまり、立正大学が大学問題の季節になにもしていないのが非常にさびしい。宗門の学生なり、教員も含めて、まともに現代の問題を受け止めるエネルギーがなかったことは大いに反省しなければならん。

丸山 時間がきましたので、締めくくりに…。具体的な問題はたくさん出たけれども、経理の問題がある。理事会に報告されている経理関係の文書を見ても、問題はすでにそこにさえあるわけです。返済のあてのない借金であるとか、資産を非常識に再評価して水まししているとか、あるいは減価償却を最低にみているとか。例えばバスなんか原価償却していない年度があるじゃないかな。

そういうことまで触れなかったが、大学問題の本質は一応出てきたと思う。「所報」というのは年に一回しか出ないが、大学問題はこれで終りというわけではないんで、なにかの形で臨時号でも出して、大学のレポートをやっていくことにしないと、宗門人は大学のことをなにも知らされないうちにいつのまにか消えてなくなっていたとか、宗門の大学ではなくなっていたということが起こりかねない状態です。

A 宗立大学としての立正大学には大きな問題がいっぱ

いあるし、宗門の人全部に知ってもらって、宗門全体で、立正大学を考えてもらいたいと思います。場合によっては立正大学を捨ててもよいというぐらいな覚悟を持ってやってもらわなければならない。こういう試みは一回限りではなくて、問題・問題によって特集でもなんでもいいから出していかなければならないですね。

丸山　私も、一度問題を明らかにしてみなければならないと考えたので取り上げたわけです。

B　中にいるもの、特に私らのような経験を積んできた人間はうっかりすると話だけになってしまう。これは個人的には警戒しなければいかんと思うのです。とにかく私らはこういう討論を通じて自分自身の立て直しをしたいし、そういうつもりでいるから、宗門の人々も一つ、他人事と思わないで考えていただきたい。やがていまは小さい寺院の子供たちも立正大学があればはいるだろうし、その人たちが宗門の明日を担っていかねばならないわけです。そういう幼ない世代に宗門の大学を残し、伝えていくことができるかどうか、やはりここで考えもし、力をあわせてほしいと思う。

A　財政問題を解決するうえでも手をかしてもらいたいと思いますね。

立正大学が今後どうあるべきかという、ある程度具体性を持った方向はきょうは全然話あわなかったわけですが、これは意識的にはずしてしまったんです。また日本の現状と大学の問題とか、そのなかにおける宗立大学の問題という観点もはずしてしまいましたね。きょうの話のなかでやはり重要なのは、いまの立正大学にはいろいろな問題が山積しているが、それは教団自体の日蓮聖人に対する信仰の姿勢、それを受け止めたうえで社会に対する対応の仕方、そういうところから立正大学そのものの問題も出てきているのではないかということだったと思う。宗立大学という理念の問題が出てきている。だから、立正大学をほんとうの意味で教団が、自分のものであると考えなければいけない。そう考えていかなければ、教団を背負っていく宗門子弟そのものが育っていかないと思う。大学問題は大学自体で考えていかなければならないけれども、同時に教団と深い関係がある問題でもある。教団に金がないというけれども、なんらかの形を考えれば立正大学を支える程度の基盤は教団に充分あると思います。それが出来ないような宗門ではないと確信しています。それだけの力を持った日蓮教団だと思います。

B　きょうの問題をともかく出発点として、宗門にやる

気を出してもらいたいと思う。具体的な問題としてAさんに聞きたいと思ったのは、宗門として立正大学に、具体的に、経済的なテコ入れする方策があるか、ということなんです。

A　方策がなければわれわれで考えるということになるでしょうね。

丸山　問題は、Bさんがいった宗門へ呼びかける姿勢と「われわれもやるという」決意と二つあると思う。われわれもとりくむから、宗門が宗門としてあるならば、われわれの誠意、われわれの決意に呼応していただきたい。やる以上は責任を持っていかなければならないんで、無責任に意見をだすだけではなくて、からだを動かして問題にぶっつかっていかなければならない。今日からでもやらなければどうもならんところにきていると思うし、この危機克服の努力に対して仏祖の加護はあるものと信じています。立正大学を見捨てるほど日蓮聖人も苛酷ではないでしょう。

B　それは丸山さんのような学外者から私らに対する励ましのムチとしておうかがいしましょう。

丸山　どうもありがとうございました。

（了）